

**<講演抄録>1. マウス口腔粘膜上皮ケラチンの免疫組織化学的研究(東日本学園大学歯学会第7回学術大会(昭和63年度総会))**

著者名(日)	三浦 成実, 武田 正子
雑誌名	東日本歯学雑誌
巻	8
号	1
ページ	85
発行年	1989-06-30
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1145/00007440/">http://id.nii.ac.jp/1145/00007440/</a>

## 〔学会記録〕

## 東日本学園大学歯学会第7回学術大会

(昭和63年度総会)

## —講演抄録—

(平成元年2月25日, 薬学部大講堂)

## 1. マウス口腔粘膜上皮ケラチンの免疫組織化学的研究

三浦成実, 武田正子  
(口腔解剖II)

上皮細胞には, 細胞骨格を成す直径10nm の中間径フィラメントが分布する。このフィラメントは, 分子量40-70KD の約20種類のサブタイプを持つケラチン蛋白から成る事がわかっている。各細胞に含まれるサブタイプは, 細胞の種類, 組織学的な分化の各段階, 発生過程などにより異なる。マウス口腔粘膜上皮は, 部位により角化形態が様々である。そこで, ケラチンに対する三種類のモノクローナル抗体による反応を PAP 法で行い, 口腔の種々の部位の粘膜上皮の反応性を光顕で観察し, 検討した。PKK1 抗体(M, W, 40, 45, 52・5KD に反応)では, 観察した全ての部位の基底層, 角質層が陰性となったが, 深部, 浅部中間層で陽性の A グループ: 軟口蓋, 口唇粘膜, 糸状乳頭間上皮, 歯槽粘膜, 歯肉溝上皮と, 陰性の B グループ: 硬口蓋, 歯肉外縁上皮, 糸状乳頭上皮, 付着上皮とに分かれた。PKK 2 抗体(M, W, 40, 46,

48, 54KD に反応)では, PKK 1 抗体と反対に, 全ての部位の基底層は陽性となり, 深部, 浅部中間層では, 陽性のものが, 硬口蓋などの B グループ, 陰性のものが, 軟口蓋などの A グループであった。KL 1 抗体(M, W, 56KD に反応)では, 部位により反応が様々であった。A グループは, 口腔内で可動性を必要とされる比較的角化の弱い上皮群で, B グループは, 付着上皮を除いて, 機械的刺激に耐えうる比較的角化の強い上皮群であると考えられる。比較的角化の強い上皮群と弱い上皮群で, PKK 1 抗体, PKK 2 抗体による反応の違いがあり, また, 糸状乳頭において, 角化形態の異なる前面部と後面部で, PKK 2 抗体, KL 1 抗体の反応の仕方が異なるなどのことから, 口腔粘膜上皮の角化形態とケラチン蛋白のサブタイプの間には, 関連があると推測される。

2. HB<sub>s</sub>抗原ならびに HB<sub>s</sub>抗体の核医学検査の分析

—昭和63年度の歯学部臨床実習生について—

西とも子, 佐野友昭, 金田英生  
菊池文利, 大西 隆, 高野英明  
小林光道, 金子昌幸  
(歯科放射線)

今回, 私たちは臨床実習生の B 型肝炎対策の一助とするために, 昭和63年度臨床実習生全員の HB<sub>s</sub>抗原, 抗体